

ローマ帝国形成期コルドウバの「ローマ人」

宮 寄 麻 子

はじめに

ローマ帝国の支配の単位である属州では、先住民の帝国社会への統合と、それに伴う多様な領域での変化があった。この変化を説明するために、一九世紀末以降ローマ史研究では「ローマ化」なる概念が用いられてきた。

従来の「ローマ化」概念に備わるさまざまな問題点とそれへの批判——帝国主義的言説、オリエンタリズム、概念の混乱等——については、既に繰り返し紹介されてきた^①。だが批判は批判として、ローマ国内各地におけるなにがしかのローマ風の生活の定着と、先住民の帝国社会への一定程度の統合を説明する語としては、「ローマ化」以

上に有効なものはないのではあるまいか。この考えに基づいて私は、属州民の「ローマ化」の実態と、帝国にとってのその意味を問いたいと考えている。検討対象は、帝国形成最初期に属州となったイベリア半島の、中でも半島南部の属州、アウグストゥス以前はヒスパニア・ウルテリオル *Hispania Ulterior*（以下、「ウルテリオル」と表記する）、アウグストゥスによる再編以降はヒスパニア・バエティカ *Hispania Baetica* とする。既に本稿以前に、この属州における先住民社会のローマ支配下での変容について、予備的な論考を進めてきた^②。

紀元一世紀の著書『地理学』の中で、ストラボンが次のように述べている。

特にバエティス河(註:現在のグアダルキビル河)流域に暮らすトルデタニア人は、ローマ風の生活をあまりにも全面的に受け入れてしまったために、もはや自分たちの言語を忘れてしまった……中略……こうしたイベリア人たちは、その生活様式のゆえに *togati* (註:「トガを着る人」の意。トガはローマ人に固有の衣服である)³⁾ である。

この文章は、イベリア半島における「ローマ化」の典型例として、夙に引き合いに出されてきた。

ウルテリオルについては、私たちはローマ人到来以前と到来後の文化的状況について、同時期の他の地域に比して、質・量ともにある程度豊かな考古学資料および文献資料を持つている⁴⁾。それらを通して、属州設置後のこの地域の先住民の生活を概観すると、たしかにストラボンが述べるような変化が生じていたように見受けられる。

しかし、この状況を「ローマ化」という概念を用いつつ理解しようと試みるのであれば、それはいかなる意味での「ローマ化」なのか、その点を明確にしておく必要がある。

イベリア半島南西部(ウルテリオルにほぼ重なる地域)には、ローマによるイベリア半島支配開始以前から、多様

な先住民グループの在地の文化があり、前一〇世紀頃から到来・一部定住した地中海東部出自の人々——特にフェニキア人、ギリシア人、カルタゴ人——との接触による文化変容の所産として、緩やかなまとまりを持ったイベリア文化と呼べるものが、都市的居住地を中心に展開していた⁵⁾。前一九七年にイベリア半島最初の二つの属州が設置された直後から先住民とローマ側との戦いが起こった一方で、税の徴収や人員の徴募、先住民の自治など、次第に属州統治の枠組みが確立していく。また両属州では鉱山開発が進められ、イタリア商人、ローマ商人による現地での経済活動が展開した。そしてローマ人による居住地建設が行われ、イタリア人、ローマ人の定住が始まる。この状況で、特にウルテリオルでは前二世紀末以降、半島他地域に先立つて(ストラボンが述べるように)ローマ風の生活が浸透した。その大きな要因として、イベリア文化の素地の上に、イタリア人、ローマ人のこの地域への移動と定住によってもたらされ定着したローマ文化が、先住民に受容されたことがあげられてきたのである⁶⁾。

しかしウルテリオルでのローマ風の生活の浸透は、既存の先住民居住地においても一定程度見られる。これら先住民居住地の中には、グアダルキビル河流域一帯に勢力を持つ人々のそれもあり、また沿岸のガデス、マラカのような

フエニキア系の都市もあった。さらに都市的居住地以外のもつと小規模な、村落と呼べる居住地にもローマ風の碑文等を見いだすことができる。こうした多様な居住地のそれぞれで、ローマとの関係、ローマ人との接触状況、都市景観、法的地位、住民構成、あるいは自治のあり方などが多様であり、それらを前提にローマ風の生活様式が受容されていったという理解が、今日一般的にある。

このように見ると、ウルテリオル内各地の多様な現実のもとでは、「ローマ化」という概念を用いて本稿では何を論じるべきなのか。ここでは最近考古学研究から提示された、先住民の多様性と「ローマ化」との関係についての論考を四点に整理し、それを下敷きにしつつ、本稿の論点を明らかにしたい。

①ストラボンの文章中の、「トウルデータニア人はローマ人の生活様式にすっかり変わってしまった、彼ら自身の言葉さえ覚えていない。」と評されているグアダルキビル河流域の先住民は、史料ではトウルデータニア人と述べられることがままあるが、現実にはローマ人到来以前から、単一の文化集団ではなかった、②しかし共通する要素として、外来の、特にフエニキアの影響があり、それは特に都

市的生活様式に表れていた、③属州設置後には、都市的居住地を中心にこれら先住民が多方面かつ多様な形でローマ風の生活を受容していった、④ローマ側もその彼らを積極的に統合するというよりも、既存の多様性を尊重しながら、フエニキア的都市文化を足がかりにしつつ、③の変化を歓迎するという姿勢を保った。「ローマ化」という概念は、以上の四局面を前提に、この地の先住民の「ローマ人としてのアイデンティティ」が形成されていったという意味でしか用いることができない、ということである。

私は、こうした意味での「ローマ化」（以下、この語に括弧をつけることをしない）の一つのあり方を示すものとして、ローマ人が建設した居住地コルドウバ（現コルドバ）の状況を検討対象としてきた（ローマ化研究におけるコルドウバの意味についても、その際に述べている）。そして既に、ローマ人が建設したコルドウバに住んでいたと考えられる住民の多くが、前二世紀の段階では、隣接する先住民居住地の出自である可能性を指摘している。続く論考となる本稿では、コルドウバについて上の整理④の、ローマ側の役割を考えてみたい。ローマ側が先住民の文化的特性を尊重しつつ、彼らがローマ風の生活様式を受容する過程を歓迎した、という事態がコルドウバではどのように確認できるのか。そしてそれは、コルドウバに生きる先住民の

ローマ人としてのアイデンティティ獲得にどう影響したのか。これらの問いを、ローマ帝国形成過程の初期段階である、前二世紀について考えたい。本稿が取り組むのは、その第一歩としての作業となる。それは、「先住民のローマ化を歓迎した「ローマ側」とは、いったい誰のことを意味するのか、という点を明らかにすることである。以下の論点を各章について挙げておこう。

第一章。後で詳しく述べるが、ローマ居住地コルドウバにはその建設当初からローマ人が居住していた、と史料に述べられている。また、近年の考古学調査によって、コルドウバに從属する周辺諸地域にもローマ人が居住していた可能性が知られている。夙に指摘されることであるが、「ローマ人」とは民族的概念ではない。ローマ市民権を持った者が「ローマ人」である。しかし、現実史料で「ローマ人」として言及される人々は、必ずしも厳密にローマ市民とは限らない。本章では、コルドウバにはどのような人々が「ローマ人」として生きていた現実があったのかを確認する。

しかし、コルドウバやその周辺に居住していたローマ人が、先住民の変化を歓迎した、「ローマ側」の主体であったとは限らない。帝国形成期のローマにあって、政策決定を担っていた元老院こそが、先住民のローマ人アイデンティティ獲得を最も歓迎、あるいは場合によっては促した主

体であった可能性もある。

第二章。コルドウバに居住していたローマ人の意思とローマにある元老院の意思、換言すれば現地の個別の利害関係と帝国政策の、どちらが前二世紀のコルドウバ先住民のローマ化と結びついたのであるのか。この問いに対し、截然とした答えを見いだすことは至難であることは言うまでもない。一つの試みとして、本章ではローマ居住地コルドウバ建設の経緯を中心に、どちら側からのコミットがそこで見えるのか、という点に絞って考えることとする。

第三章。引き続き元老院の関与を、コルドウバの法的地位について検討する。予め述べておくと、コルドウバは帝政期にはコロニア・パトリキア *Colonia Patricia* という名を備えた、ローマ市民植民市であった。都市がローマ市民権を持つことは、その都市に居住する先住民の、法的な意味でのローマ化の最終段階に他ならない。

しかし、本稿の射程である帝国形成初期段階には、コルドウバはまだローマ市民権を持つ植民市ではない。

属州の人や居住地にどのような法的地位を与えるか、共和政期には、それは元老院の決定によった。これを踏まえ、前二世紀におけるコルドウバの法的な地位を確認した上で、この方面での元老院の関与の度合いを考えよう。

以上で本稿の作業の枠組みが定まった。とはいえ、実際

には該当する時期のコルドウバに関する史資料は、ローマ人の実像と先住民との関係について具体像を明確に示すには、絶望的に少なく断片的と言わざるをえない。このため本稿では、ウルテリオルの他の都市や居住地の状況についての知見を援用し、また考古学調査の成果に依拠しつつ、ローマ居住地コルドウバにおける先住民とローマ側との関係を再構築したい。

最後に、別稿でも述べたことだが、古代地中海世界では人間の居住空間に、その規模、景観、機能、法的地位などにおいて多様なものがあつた。ラテン語、ギリシア語ではキーウィータース *civitas*、ウルプス *urbs*、オツピドウム *oppidum*、ウィークス *vicus*、コロニア *colonia*、またポリス *polis*、アポイキア *apoklia* などとつた語がそれに応じてあるが、その使い分けは往々にして曖昧である。とはいえそれらを全て「都市」と書き表すと、それぞれの差違が全く見えてこない。そこで本稿では、ローマからならんらかの法的地位を与えられた居住空間を「都市」と呼び、それ以外のものは単に居住地と呼ぶこととする。また定住地の中で、先住民が建設したものを先住民居住地、ローマによる建設のものをローマ居住地と呼ぶ。そこには必ずしもローマ人が居住しているとは限らない。

第一章 コルドウバの「ローマ人」

第一節 ローマ居住地コルドウバ

ストラボン、コルドウバ建設に関して次のように述べる。

しかし最も大きな名声と重要性を得たのは二つの都市であつた。マルケッルスが建設したコルドウバと、ガダス人の都市である……中略……そしてこの都市（補足…コルドウバ）は最初から先住民とローマ人から選ばれた人々が居住した。これはこの地域で最初の植民市であつた。

ここで言及されているマルケッルスとは、前二世紀前半に二度属州ヒスパニア総督を務め、軍司令官として先住民と戦つた、マルクス・クラウディウス・マルケッルス *M. Claudius Marcellus* と考えられている。マルケッルスの最初のヒスパニア在任は前一六九／一六八年であり、二度目が前一五二年であつた。従つてコルドウバの建設はそのどちらかであろう。近年、この建設年代についてはさまざまな異論が出されており、上に挙げた二つの年代以外の建設年代を主張する研究者もいるが、ここではそれに詳し

く触れることなく、コルドウバの建設はマルケッルス^⑮の二度の在任期間のいずれかという前提で、この先を論じることとする。マルケッルスは前者の時期にはウルテリオル、後者にはキテリオルに在任しているので、前者すなわち前一六九／一六八年にコルドウバを建設した可能性が高いのではあるまいか(彼は前一五二年にウルテリオルでも戦い、コルドウバで冬営している。しかしその時期は短い)。

これも別稿で述べたことではあるが、重要な点に言及しておきたい。ローマ居住地コルドウバ建設以前に、先住民居住地コルドウバが存在していた。ローマ人は、この既存の居住地に隣接して、新しい居住地を建設したのである(図1)。

ストラボン^⑯は、ローマ居住地コルドウバ建設当初から、ローマ人が入植したと言う。これは前二世紀で、文献資料から確認できる唯一の例である。しかし前二〇六年には大スキピオがイタリヤ人のための居住地イタリカを建設したことが知られており、その約四〇年後にローマ人が住まう居住地が建設されたということ自体を疑う必要はなからう。

さて時期は下るが、遅くとも前一世紀中葉には、コルドウバにはローマ市民の協議会コンウエントウス・キウウィウム・ローマノールム *conventus civium Romanorum* が

あったことがわかっている。カエサル^⑰の『内乱記』によると、彼とポンペイ^⑱ス派の戦いに際し、コルドウバのコンウエントウスは、ポンペイウス側の將軍ウァッロー^⑲の入市を拒んだ。後にカエサルは、コルドウバの全ての住民に對して謝意を表明した。彼は、「ローマ市民には町を自らの権限下に置き続けよう^⑳と努めたことに感謝した *gratias agit, civibus Romanis, quod oppidum in sua potestate studuissent habere*」。^㉑この「ローマ市民」は文脈からして、コンウエントウス^㉒成員であろう。ローマ市民たちが、カエサルとポンペイウスのどちらの側を支持するかで揺れていたコルドウバ市政を動かしたのである(この出来事の意味については、第三章で再び取り上げる)。

このように、コルドウバには都市建設当初からおそらくローマ人が居住しており、その後約一〇〇年の間にローマ市民の数は、コンウエントウスを形成し市政を動かし得るだけに増加していた。

これはコルドウバとは直接関わりはないが、前一二三年のコンスル^㉓が、海賊対策のためにバレアレ^㉔ス諸島に新しい植民市 *Palma* とポレンティア *Pollentia* を建設した、と伝えられる。彼は、ヒスパニアから三〇〇〇人のローマ人を新植民市の住民として移住させたという。コルドウバ以外でも、前二世紀末のヒスパニアには、相当数の

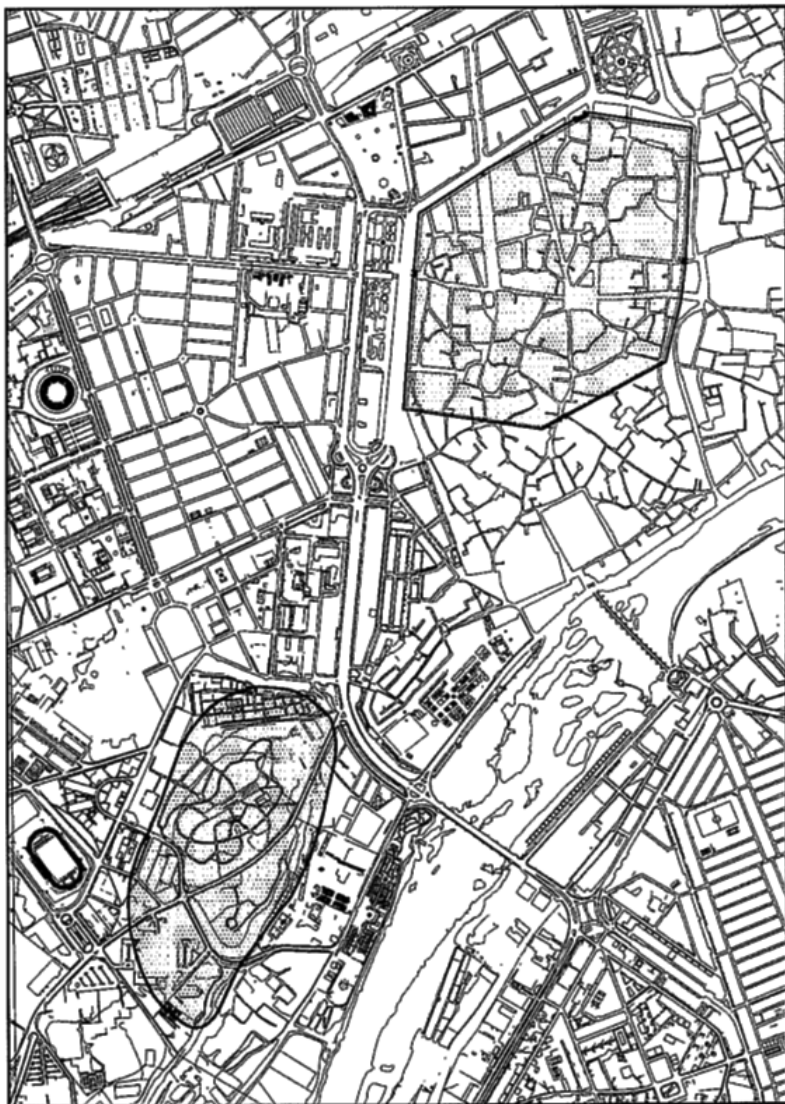


図1：先住民居住地コルドウバ（左）と、ローマ居住地コルドウバ（右）。
(Melchor Gil, E., Historia de la Córdoba romana desde su Fundación hasta el advenimiento del principado in Rodríguez Neila, J. F., (ed.), *La ciudad y sus legados hisotóricos:CÓRDOBA ROMANA*, Cordoba, 2017.)

ローマ帝国形成期コルドウバの「ローマ人」(宮崎)

ローマ人が居住していたのかもしれない²⁰⁾。

他方、コルドウバに居住していた先住民については、別稿で見たとおり、おそらく多くは先住民居住地コルドウバの出自であろうということ以外は、ほとんど実像が見えない²¹⁾。後述するように、前二世紀の間のローマ居住地コルドウバの構造と建造物は、ほぼ先住民のそれと等しい。

『内乱記』では、カエサルはコルドウバのローマ市民のすぐ後に、「ヒスパニア人に対して、守備隊を追い出したことについて」感謝した。つまりこの時期のコルドウバでは、カエサルがローマ市民と並んで感謝せねばならないほどに、先住民もまた市政に大きな影響力を行使していた、と考えて良いだろう²²⁾。

このように、前二世紀の建設当初からローマ人と先住民とが居住していたローマ居住地コルドウバでは、ローマ人の数が前一世紀中葉までに増大し、とりわけローマ市民の影響力が強化されたと考えて良からう。ただし、前二世紀末までは、この居住地の構造、景観が隣接する先住民のそれと似ていることから、人口に占める先住民の比率は大きかったと言えそうである。カエサルによると、その影響力は前一世紀半ばまで持続していたのであろう。

第二節 コルドウバの「ローマ人」

では、コルドウバに居住していた「ローマ人」とはどのような人々であったのか。

前一世紀中葉にはローマ市民が相当数いたことは、既に見たとおりである。しかし既に述べたように、ローマ市民権を持つ者のみが史料で「ローマ人」と呼ばれているわけではない。ストラボンのようなギリシア人著作家の文章では、*Romaios* という語の中に、多様な立場の人々が含まれていることがある。残念ながら、その実像は史料では述べられていないが、コルドウバとウルテリオルの前二世紀の全体的な状況から類推してみたい。

属州設置直後から両属州に駐留していたローマ軍は、都市部に主に冬営のための基地を置くようになる。ウルテリオルに隣接するもう一つの属州ヒスパニア・キテリオル *Hispania Citerior* (以下、キテリオルと表記する) のカルタゴ・ノウアでも、エンポリウムでも、前二世紀初頭に都市内で基地のための造営事業が進んだ²³⁾。コルドウバからはそれと同等できる建造物は発見されないが、基地があつた、ないしはなんらかの軍事施設が備わっており、軍の少なくとも一部が駐留していたことは疑いあるまい²⁴⁾。そこにはローマ軍団兵とは限らず、同盟軍のイタリア諸都市出身者も含まれる。

軍の施設に近接して新たにローマ居住地が建設され、退役兵が入植することは一般的であった。退役兵もまた、ローマ軍団兵に限らず、イタリア諸都市出身者もいた。最も有名な例は、先に挙げた前二〇六年のイタリカ建設である。大スキピオはイタリア出身の退役兵のためにこの居住地を建設した⁽²⁸⁾。

軍事施設周辺には、民間人も集まってくる。前一九五年にヒスパニアで軍司令官だった大カトは、軍の糧食を地域の先住民から徴発して、糧食を売りつけようとする商人たちを追い払っている⁽²⁹⁾。

これら民間人の中にはまた、鉱山経営に従事する者たちもいたと考えられる。前一世紀のディオドールスは、属州設置直後からカルタゴ・ノウア付近の鉱山開発のために、多数のイタリア人が移動してきたと述べる。

しかしベリアがローマ人の手中に入った後は、(補足・カルタゴ・ノウアの) 鉱山は多数のイタリア人に経営された。彼らの貪欲さは大変な富を彼らにもたらした。なぜなら彼らは大量の奴隷を買い、その者たちを鉱山の労働現場監督下に置いたからである⁽³⁰⁾。

この時期のコルドウバについては同様の記述はない。し

かし遅くとも前二世紀末から前一世紀初頭には、コルドウバの北東に位置するシエラ・モレナの鉱山経営の規模は、カルタゴ・ノウアを追い抜いている⁽³¹⁾。

コルドウバからシエラ・モレナに入った場所で調査が進んだラ・ロバの村落定住地の遺跡からは、前二世紀末頃から前一世紀初頭頃の、多くの小規模な住居と並んでアトリウムとペリステイリウムを備えた大規模な住居の遺構が発見されている。この時期にはコルドウバ近隣には、鉱山経営に従事し、おそらくは在地の先住民を労働者として雇用していたイタリア人ないしローマ人が居住していたということである⁽³²⁾。そして、シエラ・モレナから産出される鉱物の精錬、輸送、取引といった各過程にもまたイタリア人、ローマ人が携わっていた事例が知られている。その一部がコルドウバないし近隣の居住地に居住していなければ、こうした事業の経営は困難であろう⁽³³⁾。

この事態は、先に挙げた軍の駐留と深く関わる。シエラ・モレナやその他の半島南部の鉱山地域では、遅くとも前二世紀末頃以降、鉱山と幹線道路に砦や監視塔が連なって設置されるようになった⁽³⁴⁾。鉱山開発と鉱物資源の輸送を軍が守備していたのである。前一五〇年代中葉から前一三〇年代はルシタニア戦争とケルトイベリア戦争が両属州を大きな危険に陥れており、戦争終結後も未だ警備なしに物資を

ローマ帝国形成期コルドウバの「ローマ人」(宮寄)

輸送できるほど安全ではなかったであろう。コルドウバ
に関して言えば、シエラ・モレナに近い最大の居住地であ
るここに(図2参照)、遅くとも前二世紀末までに軍が常
駐するようになっていた可能性は、さらに強まることにな
る。

最後に、コルドウバに居住していた可能性が高い、別の
性格のローマ人を挙げておかねばならない。それは属州ウ
ルテリオルの総督と彼に従う者たちである。前一二二年、
ウルテリオル総督のルキウス・カルプルニウス・ピーゾー・
フルーギー・L. Calpurnius Piso Frugi が、壊れてしまっ
た自分の黄金の指輪を修理するため、コルドウバの「広場
の裁きの場に in forum ad sellam Cordubae」金細工師を
呼んで、金の重量を(こまかしがないことを示すために)
公衆の面前で測らせた、という逸話をキケローが語ってい
る。「裁きの場」という文言から、コルドウバには総督が
開廷する法廷があつたことがわかる。また壊れた指輪を修
理させるために、わざわざコルドウバに向いたというこ
とも考えにくい。属州総督は軍司令官であるので、戦争状
態が起これば当然自らが軍を率いて戦場に出ることがあ
る。しかしそうでない場合は、彼はおそらく在任期間中コ
ルドウバに居住していたのであろうし、総督に伴われて他
の政務官(前二世紀段階では一名のクワエストル)、下僚、

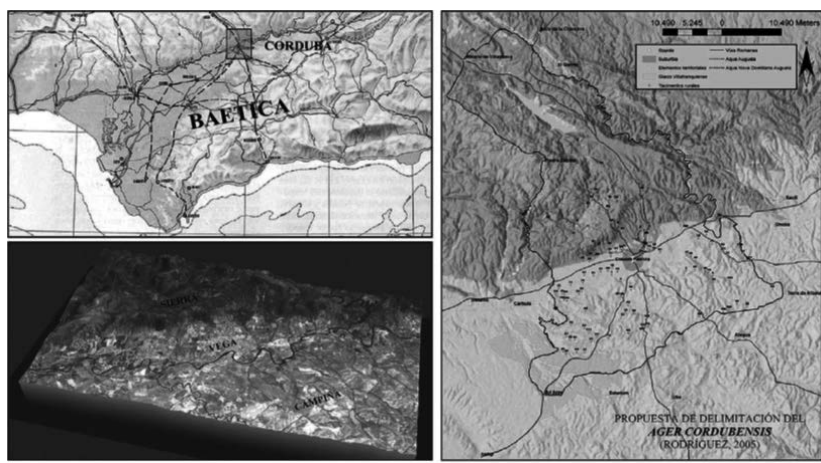


図2: Vaquerizo, D. & Murillo, J. F., THE Subursbs of Corduba, in “Conimbriga” LVI, 2017, p. 145.

側近たちも、少なくともその一部はコルドウバに居住していたと考えて良いだろう。総督に任命されるコーンスルないしプラエトルの任期は一年であり、総督として実際に属州に到着するのは着任の数ヶ月後が通常であるが、前二世紀を通して彼らが任期満了後もさらに一年以上、総督としてウルテリオルを統治した例が多くある。少なくとも数ヶ月、長ければ二年か場合によってはそれ以上、彼らの一部はコルドウバに居住したことになる。その大半はローマ市民のはずである。

以上を整理しておこう。前二世紀、コルドウバに定住したローマ市民とイタリア諸都市市民の中には、軍関係の者たちがおそらくいた。ある者は兵士として、ある者は退役兵として、ある者は軍の需要を満たす商人等として。これと並んで、おそらくこの地域の豊富な鉱山資源の開発・運営に携わる業者もいた。そしてまた、鉱山資源の取引や輸送に従事する者たちの少なくとも一部も、コルドウバないしその周辺に居住していた可能性がある。さらに、総督とその周辺の人々（おそらく大半はローマ市民であり、ローマの有力者）もまた一部はコルドウバに居住していた。

ここまで見てきたように、前二世紀後半までコルドウバを含むグアダルキビル河流域一帯では、軍事的な不安定要素と鉱山開発の重要性の増大という状況があった。この状

況を背景に、ローマ居住地コルドウバには建設当初から、さまざまな法的立場の者をおそらく含みつつ、ローマ市民に限定されない「ローマ人」がイタリア半島から移動し、居住していた。彼らの中のどのような部分が、コルドウバおよびその周辺に居住する先住民のローマ化を歓迎したのであるうか。あるいは彼らイタリアから現地に移動し、恒久的にないし期間限定的に居住した人々は、総じてそれを歓迎したのだろうか。ないしはそうではなく、元老院こそがコルドウバの先住民のローマ化を望んだのであろうか。第二章でこの点を検討しよう。

第二章 元老院とコルドウバのローマ人

第一節 前二世紀前半のウルテリオル

まず、ローマ居住地コルドウバが建設されたと考えられる時期の、ウルテリオルの状況を整理しておきたい。属州設置直後から、両属州で各地の先住民とローマの厳しい戦闘が継続していたことは、既に述べた。しかしこの状況は、前一七〇年代初頭にいったん収束する。前一七九年にキテリオル総督ティベリウス・センプロニウス・グラックス *Ti. Sempronius Gracchus* が、キテリオルの先住民と「入念に取り決めた条約を締結した。そして彼らをローマ人の

友となし、それを実現するための誓約を交わした^⑧。このグラックスの「条約」は、おそらく先住民からの税徴収の方法などを一定程度確定する一方、先住民の自治を承認する内容であった。この「条約」が、キテリオルの先住民のみならずウルテリオルの先住民にとっても以後、ローマと先住民諸グループとの関係の基礎となる^⑩。

これ以降、ローマと先住民との関係は軍事対立を脱却し、安定的な関係が構築され始めた。おそらくこの点に関連していると考えられる、重要なできごとが前一七一年に起こった。ヒスパニア先住民諸グループの代表者たちがローマを訪れ、元老院に対して属州総督による先住民への搾取の厳しさを訴え、「ローマ人の友にふさわしい扱い」を要求したというのである。元老院はこの請願を受けて調査を行い、訴えられた元総督が自ら地方に隠遁(事実上の追放)したことで幕引きとなった^⑪。

イベリア先住民がローマにおもむき、元老院の前で直接請願を行ったことは、史料上はこのできごとが初めてである。元老院の主導で、ローマが彼らの請願に基づいて政務官経験者を事実上裁き、罰したという例もこれ以前は見られない^⑫。

さらに同年、ヒスパニアの別の使節が元老院に請願を行った。この使節はイベリアに駐留していたローマ軍兵士と

先住民女性の間にも生まれた子四〇〇〇人のために、新しい町を与えて欲しいと願った。元老院は、この人々が既存の先住民居住地カルテアへ入植することを認め、さらにカルテアにラテン権植民市の地位を与えた。これが史料上で明確に確認できる、ウルテリオル最初の植民市である^⑬。

私は別稿で、ヒスパニアでコルドウバ以前に建設された計五つ(ただし、うち二つは信憑性が弱い)のローマ居住地の建設者、建設年代等を整理した。繰り返しになるが、ここで再度簡単に挙げておこう。最も古いものは前二〇六年(第二次ポエニ戦争中)に、大スキピオが建設したウルテリオル総督、ルキウス・アエミリウス・パウルス「Aemilius Paulus」のもの、次いで先に言及したグラックスが二つの居住地を建設したと言われるが、そのうちの一つの信憑性についても議論が決着しない。そして前一七一年のカルテアである。カルテアより前のものは、全て戦争状態にあつて建設されたものであり、これらを建設したのはローマ軍の司令官である。その中で、イタリアのみがイタリア人退役兵のための居住地であるが、他の三つはすべて先住民のために建設されたと伝えられている。

カルテアより前の居住地は、先住民との戦いの中にあつた軍司令官が、その都度の状況の中で戦略的に建設した

ものと考えてよいだろう。その意味で、カルテニアの特殊性は際立っている。先に見たとおり、この都市の建設は元老院主導によるものだからである。カルテニアのこの特殊性は、前二世紀では唯一の例外といつてよい。前一三〇年代にはさらに二つのローマ居住地が建設されるが、どちらも現地の軍司令官が先住民のために建設したものである。この時期には、ローマと先住民の間は再び戦争状態となっている。

要するに、前二世紀のローマ居住地のうちカルテニアを除く全てが現地の軍司令官によって建設されており、その多くはローマと先住民の戦争状態の中で起こっている^④。

コルドウバが建設されたのが前一六九／一六八年であったなら、それはカルテニア建設のすぐ後である。前一五二年が建設年であったとすれば、すでにウルテリオルは戦争状態に陥っているが、それはこの時点ではウルテリオル西部に限定され、コルドウバが位置する地域は未だ戦場となっていない^⑤。

いずれの建設年をとるにせよ、マルケツルスがコルドウバを建設したのは、その周辺地域において属州設置後から前一三三年のケルトイベリア戦争終結までの期間中、ローマと先住民との関係が安定していた時期ということになる。だとすると、マルケツルスがこの時期に居住地を建設

した目的は、先に挙げた他の（カルテニアを例外とした）ローマ居住地の建設者と同じ——すなわち先住民との戦いの中での戦略的理由で——とは考えにくい。次いで、隣接する先住民居住地コルドウバとの関係を視野に入れつつ、マルケツルスのコルドウバ建設の目的を検討しよう。

第二節 マルケツルスのコルドウバ建設

先住民居住地コルドウバはグアダルクピル中流河岸に位置し、古くから東西に伸びる道路上で周辺平野部の近隣居住地と、そしてほぼ南北に延びる道路で北東の山地シエラ・モレナと結ばれていた。この地理的条件を武器に、この先住民居住地は平野からの農業生産物と、シエラ・モレナの豊富な鉱山資源の交易センターとしての役割を果たしていた^⑥（図2）。

マルケツルスはこの先住民居住地を破壊することなく、約七五〇メートル北東に離れた、標高一二〇メートル弱の丘の上に新しい居住地を建設した。この位置からは、先住民居住地を容易に見下ろすことができる^⑦。

マルケツルスが新しい居住地を建設した目的に、隣接する先住民居住地の監視という要素があったことは容易に見て取れる。その点は、前章で見た建設当初からの軍事的性格とも一致している。しかし軍事的性格といつても、先住

民との関係が良好なこの時期に、それは戦略上の必要性ではなかったであろうことは先に述べたとおりである。

私はここに、これも前章で確認した鉱山開発の進展が関係するのではないかと考える。マルケッルスのコルドウバ建設と、ローマ人の鉱山開発を結びつける史料の記述はない。しかし、前二世紀初頭以降展開する次の諸状況は、この仮説を強く支持するものとなるろう。

属州設置直後の前一九五年から一九四年にかけてキテリオル総督に在任した大カトは、両属州各地で先住民と戦う傍ら、(おそらく北部のエプロ河流域で)銀鉱と鉄鉱から巨額の富を得たという (*pacta provincia vectigalia magna instituit ex ferrariis argentariisque*)⁽⁴⁸⁾ *Vectigalia* はこの時点では、本来の意味である公有地ないし国営鉱山用益者からの税ではありえず(この時点の属州ではまだその制度が未確立)、大カトは単に在地の鉱山から戦利品として富を奪ったのであろう。これ以降のヒスパニアについて、鉱山からの収益に関する史料の記述が増える。明らかに、前二世紀初頭以降ローマ人は、現地の鉱物資源の豊富さに気づき、鉱山開発に本格的に着手することになったのである。

前章で見たとおり、鉱山および鉱山生産物搬路における軍の守備が前二世紀末頃までに強化された。この時期のヒ

スパニアの鉱山は既に国営であったかどうか、明確に述べることはできない⁽⁴⁹⁾。しかしいずれにしても現実に鉱山経営および生産物輸送に従事したのは、前章で述べたように私的な事業者であった。そして彼らの安全を確保したのは現地の軍であった。

もう一点、属州設置後、両属州各地の先住民居住地で貨幣製造が増加する。これは一面では既にこの時期からヒスパニアにおけるイタリア人、ローマ人の経済活動が活発化していたことを示唆しているよう。すでに第二次ポエニ戦争前にカルタゴ勢力がシエラ・モレナ産出の銀で貨幣を製造しており、また前三世紀末には先住民居住地で鑄造された貨幣をローマ軍が使用していたことがわかっているが、先住民の貨幣使用が一般化するのには遅れるからである。他方、これらの急速に増加した貨幣が、駐留するローマ軍の兵士への給与支払いのために用いられた可能性が高い。キテリオル総督であったクイントゥス・フルウィウス・フラックス *Q. Fulvius Flaccus* は、前一八〇年にローマに帰還した際に元老院に対して、軍に対して通常支払われるべき金銭も、食糧も必要としなかったと報告し、凱旋式挙行を要求したという。ここで言及された「通常支払われるべき金銭」とは兵士への給与であり、それをフラックスは現地調達したということである。各地の共同体からの貨幣の供出

が、兵士への現地での速やかで安定した給与支払いを可能としたことである。おそらくグラックスの「条約」後に、この先住民居住地からの貨幣による支払いシステムが次第に確立されたと見て良い。後世には属州税であるステイペンディウム *stipendium* へ発展するのであろうが、前二世紀を通してそれは未だ制度化されていない。

共和政末期までにウルテリオルの先住民居住地で貨幣を鑄造したことが確認できているものは約七〇箇所を数えるという。その一つがコルドウバであった。

以上の状況を背景に、改めてマルケツルスのローマ居住地コルドウバ建設の目的について考えてみたい。イタリア人、ローマ人によるシエラ・モレナの鉱山経営が進む中、そこからあがる生産物は彼ら商人だけでなく、現地の総督にとっても重要な意味を持っていた。一部は現地の軍の需要のために、一部はローマに送り国庫を富ますことで帰国後の政治的声望を増やすために（そして一部はおそらく、前一七一年に制裁を受けた元総督のように、私欲のために）。鉱山開発はおそらく貨幣鑄造の増加につながり、兵士への給与支払いを容易にかつ安定したものにできた。

シエラ・モレナおよび近隣地域、さらには河川を利用しての遠距離地域を結ぶルートを利用して鉱物資源の交易に従事していた先住民居住地に隣接して、マルケツルスはロ

ーマ居住地を建設した。その目的は、イタリア商人、ローマ商人によるシエラ・モレナの鉱山開発を準備し、さらに鉱物資源の安定した運搬を確保することにあつた、と考えることが妥当であろう。

第三節 先住民と「ローマ人」

ローマ居住地建設後も存続した先住民居住地コルドウバでも、古くから展開していた交易活動は途絶しなかった。先住民居住地から出土する陶器等から見て、先住民が従来どおりにウルテリオル他地域の先住民と、あるいはイタリアとの交易を継続していたことは間違いない。ローマ居住地コルドウバと先住民居住地とのそれぞれの交易活動が相互にどう作用していたのか、史料からはうかがえない。だが、ストラボンの「この都市は最初から先住民とローマ人から選ばれた人々が居住した。」という記述は、示唆的である。この、建設当初から選ばれて居住した先住民がどこから来たのかストラボンは語っていないが、特段の言及がないことはむしろ、少なくともその一部が先住民居住地コルドウバから移住したという最も自然な状況を踏まえているのではなからうか。

先にも述べたが、コルドウバのみが建設当初から先住民とローマ人を居住者としていたのかはわからない。しかし

こうした記述が他になく、ただストラボンの、コルドウバに関する記述の中にのみ現れることは、これが特殊な状況であったことを示唆しているのかもしれない。もしそうであるならば、マルケッルスはコルドウバでの鉱物資源の交易について、長い経験を持つ先住民との協力関係を企図していたのかもしれない。これは推測の域を出ないが、前二世紀に属する港湾施設が発見されていないことから、先住民居住地の既存の港湾施設と輸送ネットワークが、「ローマ人」にも共有されたのかもしれない。

前二世紀を通してローマ居住地の都市構造も建造物も先住民のそれとほぼ変わらず、人口の大半は先住民であったこと、また前一世紀初頭には、先住民居住地コルドウバが放棄され、住民はおそらくローマ居住地コルドウバへ移動したと考えられることなどを踏まえると、少なくとも先住民とコルドウバに居住する「ローマ人」との関係は良好であったと考えて良いだろう。

以上を整理しよう。ローマ居住地コルドウバは、展開しつつあった鉱山開発に従事する民間の「ローマ人」と、そこから利益を得ているローマ軍司令官(Ⅱ属州総督)の利害の一致によって建設され、発展したと考えられる。そしてこれら「ローマ人」と、近隣およびローマ居住地内に居住する先住民との関係は少なくとも良好であり、しかし

たら協力関係にあったのかもしれない。

反面、際立つのが元老院の存在の希薄さである。コルドウバの建設に、元老院が関与していたという記述が史料中に全く現れないことは、ストラボンの文章の短さからみて不自然ではないが、居住地建設の背景となる当時の状況の中にも、元老院の姿はわずかにしか見えてこない。その中で特筆すべきなのは、一つには前一七一年の二つのできごとであり、もう一つには大カト以降、鉱山資源の国庫への納入にまつわって軍司令官たちが元老院に自らの功績を誇示する場面である。とりわけ前者については、属州統治に元老院が直接介入した重要な事例と言えよう。中でも都市カルテイヤが建設当初から植民市であったことは、ウルテリオルのローマ居住地建設において、元老院の明確な意思が働いた例として重要である。ではコルドウバの法的な地位はどうであったのか。次章でこの点を考えることによって、この居住地に対する元老院の関与について、さらに検討したい。

第三章 コルドウバの法的地位

ローマの植民市については、その特権の具体的な内容、歴史的背景、そして帝国統治におけるその意義についてぶ

厚い研究と議論の蓄積があるが、その点については本章は触れない。ここでは、前二世紀コルドウバに対する元老院の関与の度合いを論じることを目的として、ただこの時期になんらかの法的地位が与えられていたのかどうか、という点のみを確認するに留めたい。

ローマ居住地コルドウバの法的地位については、ストラボンの記述の中に「この地域で最初の *uroukia*」なる表現があるということ、第一章で見た。それにも拘わらず、コルドウバの法的地位については、議論が決着していない。中でも本章の問題に直接関わる問題は以下の通りである。ウルテリオルにおけるローマ市民植民市の存在についてはほぼ全ての研究者がカエサル期まで認めない。しかしラテン権植民市についてはカルティアを例外としても、その他のいかなるローマ居住地にも該当しないと見る見解と、イタリカ、コルドウバ、そして前一三八年建設のウアレンティア、前一二三年建設のバルマおよびポレンティアの計五つはラテン権植民市であったとする見解とに大別される^⑧。(この前提にはさらに、そもそも *uroukia* なるギリシア語が、植民市と訳されるラテン語のコローニア *colonia* と同義であるのか、という議論と、また史料中でコローニアという語が厳密に法的な意味で用いられているのか、という議論がある。しかしその詳細については本稿では触れ

ない)。

私は別稿で、前二世紀のコルドウバにはいかなる法的な地位も確認できないと述べた^⑨。現在もその見解に変わりはないが、それを次の論拠で補足しておきたい。第一章第一節で、内乱期のカエサル軍とポンペイウス軍に挟まれたコルドウバの対応を取り上げた。その時点ではコルドウバはポンペイウス側の将軍に市門を閉ざしたため、後にカエサルが住民に感謝の演説をした。その際に、カエサル側にくくことを決定したのがローマ市民の協議会であるコンウエントウスであった。

ローマ市民のコンウエントウスが植民市にもありえたこと、従ってその存在によってコルドウバが植民市でなかったという結論には至らないという点は、既に多くの研究者によって指摘されている^⑩。しかし、この時の状況は単にコンウエントウスがあったということでは説明ができないのではあるまいか。もしこの時点でコルドウバが植民市であったなら、当然ローマ的な都市政務官と都市参事会が備わっていないなければならない。カエサルの記述にはこの二つへの言及が一切ない。

繰り返しとなるが、第一章第一節で挙げたカエサルの文言を再掲しておこう。

ローマ帝国形成期コルドウバの「ローマ人」(宮寄)

ローマ市民には町を自らの権限下に置き続けよう
と努めたことに感謝を表明した。 *gratias agit,
civibus Romanis, quod oppidum in sua potestate
studuissent habere.*

これは都市参事会や政務官の意思に反してカエサル側についた、ということだろうか? その場合にはそのような事態について、なんらかの言及があるまいか。カエサルはコルドウバ居住の先住民に対しても感謝を述べた。しかしここで、なんらかの機関へ触れることは一切ない。

このように、内乱期にコンウエントウスが果たした役割と、またコルドウバが植民市であることを示す特段の証拠がないことを併せ考えると、カエサル期までコルドウバは植民市ではなかったという理解が妥当だと私は考える。

従って、法的な面においてもコルドウバに対して元老院がなんらかの介入をした、ないしはその意思を表現したことは認められない。

終わりに

以上の論考をふり返っておこう。

前二世紀前半に、ウルテリオル総督であり軍司令官であ

ったマルケツルスによって建設されたローマ居住地コルドウバには、建設当初からローマ人が先住民と共生していたと考えられる。そしてローマ人の数と影響力は、前一世紀中葉までに増大していた。とはいえ、この時期まで人口の多くは先住民が占めていたが。

この「ローマ人」の内実は、おそらくローマ市民に加えてイタリア出身者であった。彼らの一部は軍関係者(兵士、退役兵、軍に付き従う商人)であったろう。また一部はシエラ・モレナの鉱山経営と鉱物資源の輸送、売買に携わる商人・業者だった可能性がある。ウルテリオル総督とその周辺の人々(その大半はローマ市民)も、場合によって数年コルドウバに居住した。

このような、現地に(期間限定であれ恒久的であれ)居住する「ローマ人」と、帝国統治に拘わる政策を担う元老院との位置関係はどうか。ローマ居住地コルドウバの建設当時、ウルテリオルの情勢は、前二世紀中で比較的安定していた。その時期にマルケツルスがこの居住地を敢えて建設した目的は、おそらくイタリア人、ローマ人の経営によって進展しつつあったシエラ・モレナの鉱山開発と、鉱物生産の保護および交易の安全確保であった。鉱物資源は、軍にとっても、帰還すれば政界で活動するのが一般的であった総督本人にとっても、そして開発事業に従事する事業

者にとっても重要な意味を持っていたからである。⁶⁵⁾

ローマ居住地コルドウバで、鉱山開発をめぐる活動を活性化させていた軍ならびにそれを指揮する総督、そしてイタリア・ローマ商人という「ローマ人」と、現地先住民との関係は、良好なものだったと言ってよい。本稿では推論に留まるが、彼らが場合によって協力し合った可能性も除外できない。

これに対して、元老院が前二世紀のコルドウバに介入した可能性は小さい。それは法的な面においても言える。この時期のコルドウバがラテン権植民市であったとは考えがたいからである。

本稿冒頭に挙げた問題について、一応の結論が出たと言つてよいだろう。前二世紀のコルドウバにあつて、(それ自体については、本稿では取り組んではないのだが)先住民のローマ化を歓迎したローマ人がいたとすれば、それはイタリアから移動してきてローマ居住地に住み、ウルテリオルの当時の現実の中で、自身の利益を追求しようとしていたイタリア人、ローマ人たちであつたと考えるべきである。他方、元老院によるコルドウバへの介入がないといふことは、少なくともコルドウバに関しては元老院がなんらかの政策を持っていなかったことを示唆する。

しかし、元老院がウルテリオルに全く不関与であつたと

いうことではない。前一七一年に起こった二つの出来事は、この早い時点で元老院がウルテリオルの統治に関して明確に意思を示したことを伝える。前二世紀前半については、この出来事が元老院の介入を示す唯一の事例である。前二世紀後半になると、元老院が戦争終結について厳しく条件を出すようになる。そして前一三三年にケルトイベリア戦争が終結した時、元老院は戦後処理のために組織された、一〇人の元老院議員からなる委員会を派遣した。⁶⁶⁾

コルドウバに戻ろう。「はじめに」で述べたように、この居住地はアウグストゥス期になつてローマ市民植民市の地位を与えられた。その前に、最終的に自分から離反してポンペイウス側についた居住地をカエサルが破壊したので、全く新しい植民市が生まれたと言つてよいだろう。⁶⁷⁾このカエサルとアウグストゥスの時期以降、ウルテリオルのみならず属州ヒスパニアでは次々に植民市が建設されることになる。そこには、前二世紀とは異なるダイナミクスが作用したのであるが、その点は、もはや本稿の論ずるところではない。

主要参考文献

- Curchin, L.A., *Roman Spain: Conquest and Assimilation*, London & N.Y, 1991.
- Curz Andreotti, G., “Rome and Iberia: The Making of a cultural Geography”, in Bianchetti, S. et. al. (eds.), *Brill's Companion to ancient Geography: The inhabited World in Greek and Roman Tradition*, Leiden/Boston, 2016.
- Id. (ed.), *Roman Turdetania: Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Iberian Peninsula between the 4th and 1st centuries BCE.*, Leiden/Boston, 2019.
- Fear, A. T., *Rome and Baetica: Urbanization in Southern Spain c.50 B.C.-A.D. 150*, Oxford, 1996.
- García Valgas, E., “The Economy and Romanization of Hispania Ulterior (125-25BCE): The Role of the Italians”, in Curz Andreotti, G.(ed), *Roman Turdetania: Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Iberian Peninsula between the 4th and 1st centuries BCE.*, Leiden/Boston, 2019.
- González Román, C., “Romanos e itálicos en la Hispania republicana”, in Pons Pujol, L., (ed.), *Hispania et Gallia: Dos provincias del occidente Romano*, Barcelona, 2010.
- Houton, P., *Urbanisation in Roman Spain and Portugal: Civitates Hispaniae of the early Empire*, London/N.Y. 2021.
- Jiménes, A. & Carrillo, J. R., “Corduba/Colonia Patricia: the Colony that was found twice”, in Sweetman, R. J.(ed), *Roman Colonies: in the first Century of their Foundation*, Oxford & Oakville, 2011.
- Keay, S. (ed.), *The Archaeology of early Roman Baetica*, Portsmouth, 1998.
- Knapp, R.C., *Roman Córdoba*, Berkeley & London, 1983.
- Machuca Prieto, F., “Unraveling the western Phoenicians under Roman Rule: Identity, Heterogeneity and Dynamic Boundaries”, in Curz Andreotti, G.(ed), *Roman Turdetania: Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Iberian Peninsula between the 4th and 1st centuries BCE.*, Leiden/Boston, 2019.
- Melchor Gil, E., “Historia de la Córdoba Romana desde

- su fundación hasta advenimiento del principato”, in Rodriíguez Neila, J. F. (ed.), *La ciudad y sus legados históricos Córdoba Romana*, Córdoba, 2016.
- Melchor Gil, E. et al., “El Camino de Corduba a Ategua: nuevos Hallazgos de infraestructura viaria Romana en la Provincia de Córdoba”, *AAC* 8, 1997.
- Richardson, J. S., *Hispaniae: Spain and the Development of Roman Imperialism 218-82B.C.* Cambridge, 1986.
- Id., *The Romans in Spain*, Oxford, 1996.
- Rodriíguez Neila, J. F., “Colonia Patricia (Corduba), capital de la Bética”, in *Gerión* 35, 2017.
- Vaquerizo, D. & Murillo J. F., “The Suburbs of Corduba”, in *Cominbriga* 56, 2017.
- Ventura, A. et al., “Roman Córdoba in the Light of recent archaeological Research”, in Keay, S. (ed.), *The Archaeology of early Roman Baetica*, Portsmouth, 1998.
- 南川高志「ローマ帝国による統合をめぐる」『西洋古代史研究』(第二〇号、二〇二〇年)。
- 宮寄麻子「都市コルドゥバの起源とローマ化」『東洋学人間科学総合研究所紀要』第二二号、二〇一九年。

(註) (一) 伝統的な「ローマ化」を扱う代表的研究として、

Haverfield, F., *The Romanization of Britain*, Oxford, 1905のみを挙げた。また、従来の「ローマ化」概念に対する批判およびこの概念を用いた諸研究の現状については、南川高志「ローマ帝国による統合をめぐる」『西洋古代史研究』(第二〇号、二〇二〇年)五三七―七二頁(以下、南川と表記する)が非常に有益である。

(二) 宮寄麻子「変わりゆく地中海世界」南川高志編『B. C. 200年―帝国と世界史の誕生』山川出版社、二〇一八年、二二―一八三頁。同「都市コルドゥバの起源とローマ化」『東洋学人間科学総合研究所紀要』第二二号、二〇一九年(以下、宮寄と表記する)、二二五―二四一頁、および「ローマ化以前のイムリア半島の社会と文化」(第六九回日本西洋史学会大会古代史小シンポジウム報告、二〇一八年、於静岡大学)。

(三) Strab., 3.2.15. ストラボンは、この地域にはローマ人到来以前から地中海東部の文明が定着しており、それゆえにローマ的文明の吸収が容易であったと考える。Ibid., 3. 2. 13; 3, 4. 19. Cf. Curz Andreotti, G., “Rome and Iberia: The Making of a cultural Geography”, in Bianchetti, S. et. al. (eds.) *Brill's Companion to ancient Geography: The inhabited World in Greek and Roman Tradition*, Leiden/Boston, 2016, pp. 289-295.

(四) 古学の古代イムリア半島に関する研究の進展は、一九八〇年代以降めざましい。それは単に新たな遺跡調査の進展という意味だけではなく、文化人類学および歴史学との連係

ローマ帝国形成期コルドバスの「ローマ人」(宮崎)

の中で、古代イベリア社会の文化的特徴とその変遷を、多様で多層な人的グループされざれたたどった歴史の脈絡の中に位置づける必要性について新たな視野を開いたという点において、歴史学研究にとってめきめき有益である。その成果は膨大であるので、やじあたり、本論の主題に関わる著作をいくつか挙げておくに留めた。Chaves Tristán, F., *Los tesoros en el sur de Hispania: conjuntos de denarios y objetos de plata durante los siglos II y I a C.* Sevilla, 1996. Diaz-Androu, M. & Keay, S. (eds.), *The Archaeology of Iberia: The Dynamics of Change*. London, 1997. Keay, S. (ed.), *The Archaeology of early Roman Baetica*, Portsmouth, 1998 (以下 Keay と表記する)。Moreno, E. S., “Cross-cultural Links in Ancient Iberia: Socio-economic Anatomy of Hospitality”, in *Oxford Journal of Archaeology*, 2001, pp.391-413. Dieler, M. & López-Ruiz, C. (eds.), *Colonial Encounter in ancient Iberia*, Chicago, 2009. Cruz Andreotti, G., (ed.), *Roman Turdetania: Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Iberian Peninsula between the 4th and 1st centuries BCE*. Leiden/Boston, 2019 (以下 Roman Turdetania と表記する)。Houton, P., *Urbanisation in Roman Spain and Portugal: Civitates Hispaniae of the early Empire*. London/N.Y. 2021 (以下 Houton と表記する)。

(5) イベリア半島南部のローマ人到来以前の状況についての研究も、考古学研究のほぼ独壇場である。やじあたり以下の研究を挙げておく。Blázquez, J. M. et al., *Historia*

de España Antigua, vol.1: Protohistoria. Cubierta, 1997, esp. pp.127-171. Aubet, M. E., *The Phoenicians and the West*, 2nd ed. Cambridge, 2001, esp. pp.257-346. Kurz, J., *The Barcid Empire? : An economic, social and political Study of imperial Interactions between Carthaginians and Locals in southern Iberia*, Providence, 2016. esp. pp.64-174. Celestino, S. & López-Ruiz, C., *Tartessos and the Phoenicians in Iberia*, Oxford, 2019. 歴史学研究に於けるローマ到来以前の簡潔な概観として、Curchin, L.A., *Roman Spain: Conquest and Assimilation*, London & N.Y., 1991 (以下 Curchin と表記する), pp.10-23。

(6) ローマ到来以後のウルトラリオルの変容を概観するには、Curchin, pp.57-177。

(7) Machuca Prieto, F., “Unraveling the western Phoenicians under Roman Rule: Identity, Heterogeneity and Dynamic Boundaries”, in *Roman Turdetania*, pp.130-148. 農本雄也の「ローマ」のふしは Curchin, pp.125-129。

(8) Cruz Andreotti, G., “Epilogue: A new Paradigm for Romanization?” in *Roman Turdetania*, pp.186-190. García Ferrández, F. J., “Deconstructing ‘Turdetanian Culture’: Identities, Territories and Archaeology”, in *Roman Turdetania*, pp.51-52

(9) 宮崎 二二一—二二二頁。

(10) Curchin, pp.123-125. Houton, 137-164.

(11) 南川 五七頁参照。

(12) 宮崎 二二二頁。

(13) Strab.,3,2,1 “ταείστον δ', ἦ τε Κορόδοβα ἡγήηται, Μαρκέλλου

κτίσματα, καὶ δοξίη καὶ δυνάμει, καὶ ἡ τῶν Γαλιτανῶν πόλις, ἡ μὲν διὰ τὰ γεωγραφία καὶ διὰ τὸ προσεσθῆαι Ἰουδαίους κατὰ συμμαχίαν, ἡ δὲ γέγονε ἀρετῇ καὶ μετὰ τὴν, προσελαμβάνοντος καὶ τοῦ ποταμοῦ Βαίρος μέγα μέρος· ἠρῆσται τε ἐξ ἀρχῆς Ἰουδαίω τε καὶ τῶν ἐπισημοῦν ἀνδρῶν ἐπιλεκτοῖ· καὶ οὕτω κατὰ πρώτην ἀποικίαν ταύτην εἰς τοῦδε τοῦδε τόπου ἐστρατιῶν Ποταμοῦ.”

(14) Polyb., 35, 2. Liv., 43, 15, 3. App., *Ib.* 48. Knapp, R. C., *Roman Cordoba*, Berkeley & London (以下 Knapp と表記する), 1983, pp.10-11.

(15) なによりも、ウルテリオル最初の植民市カルテティアが前一七一年に建設されたこと(Liv., 43, 3, 1-4)と、ストラボンの記述「この地域で最初の植民市」が矛盾している。この点から出發して、やはりかな論争が生じた。Jimenes, A. & Carrillo, J. R., “Corduba/Colonia Patricia: the Colony that was found twice”, in Sweetman, R. J. (ed.), *Roman Colonies: in the first Century of their Foundation*, Oxford & Oakville, 2011 (以下 Jimenes & Carrillo と表記する), pp.55-56. Cf. Canto, A., “Colonia Patricia Corduba: nuevas hipotesis sobre su fundacion y nombre”, *Latomus* t. L. vol. 4, p.844. 本文で述べたように、本稿ではこの問題を詳しく論じることはできないが、この論争はロルドゥバがいつ植民市となったのかという、本稿第三章の問いとも関連しているので、稿を改めて論じてみたい。

(16) 宮崎, 二二三頁。

(17) ウルテリオルに建設された全てのローマ居住地には、ローマ人が入植したと考える研究者もいる。Gonzalez Román, C., *Ciudad y privilegio en Andalucía en Epoca*

romana, Granada, 2002, pp. 60-61. しかし、前一七八年にグラタックスが建設した居住地、前一三八年にブルートゥスが建設した居住地は、明確に先住民のためのものであったと伝えられている。この二つを含む、前二世紀のローマ居住地については、第二章で詳述する。

(18) App. *Ib.*, 38

(19) Caes. *Bell. Civ.* 2, 21, 1. また Caes. *Bell. Civ.* 2, 19, 3. 「同じ頃、ロルドゥバのローマ市民協議会も、自らヴァンローの軍に市門を閉ざし、守備兵や夜警を見張り塔や囲壁に置いた。」

(20) Liv. *Ep.* 60. Strab., 3, 5, 1-2. Richardson, J. S., *The Romans in Spain*, Oxford, 1996 (以下 Richardson, Spain と表記する), pp.82-83. González Román, C., “Romanos e itálicos en la Hispania republicana”, in Pons Pujol, L. (ed.), *Hispania et Gallia: Dos provincias del occidente Romano*, Barcelona, 2010 (以下 González Román と表記する), p.19 は「共和政期のヒスパニアにおけるローマ人の移住者は約三万人と推定する。この数値について、ガルスニアールバルガスは多すぎると評価しつつも、かなりの人口があったのでは」と推測している。García Valgas, E., “The Economy and Romanization of Hispania Ulterior (125-25 BCE): The Role of the Italians”, in *Roman Turdetania* (以下 Economy と表記する), p. 179. Cf. Bruant, P. A., *Italian Manpower, 225 B.C.-A.D. 14*, Oxford, 1972, pp. 231-232.

(21) 宮崎, コルドゥバ, 二三六頁。コルドゥバにおける先住民の人口を査定することの困難はすでに早い時期から指摘

ローマ帝国形成期コルドウバの「ローマ人」(宮崎)

- られており、現在でも大きな進展は見られない。Knapp, p.13; p.102, n.72.
- (22) Ventura, A. et al., "Roman Córdoba in the Light of recent archaeological Research", in *Keay* (以下「Ventura」と表記する), pp.89-91. そもそもコルドウバなる名前がアウラデタニア起源であることも、おそらく建設当初のこの居住地の人口が、先住民主体であったことを示唆している。Ventura, p.72, n.15.
- (23) Caes., *Bell. Civ.* 2, 21, 1. "Hispanis, quod praesidia expulissent."
- (24) Rodriguez Neila, J. F., "Colonia Patricia (Corduba), capital de la Bética", in *Gerión* 35, 2017, p.372., González Román, p. 16. *Jiménes & Carrillo*, p. 56.
- (25) *Houton*, p.50.
- (26) 建設当初から、囲壁とそれに付随する施設が極めて強固であった。また囲壁内の面積が、共和政期のローマ居住地としては突出して広い。Ventura, p.89. Jiménes & Carrillo, pp.57-58. しかく Knapp, p.9は恒常的な基地の存在は疑問視。
- (27) *Houton*, p.50.
- (28) 註一八を見よ。
- (29) *Liv.*, 34, 9, 11-13.
- (30) Diod., 5, 36: "ὄραρον δὲ τῶν Ποιυατίων κτυρητάων τῆς Ἰβηρίας, τῶν τοῦ Ἰταλῶν ἐπερώλασε τοῖς μετάλλοις, καὶ μετὰ τοῦ ἀνασφάροντο πλοῦτους διὰ τῆς φύλακεοῦσιν." González Román, p.15.
- (31) コルドウバの背後にあるシエラ・モレナ西部についての
- ストラボンの言説:「実際、現在にいたるまで金も、銀も、また銅も鉄も、世界中のどこにもこのように自然の状態では、しかも量も最良の質も備えては発見されなかったことはない。」Strab., 3, 2, 8. Cf. Ponsich, M., "The rural economy of western Baetica", in *Keay* (以下「Ponsich」と表記する), pp. 172-173. 農業へのローマ人の大規模な従事は、帝政期以降。Ponsich, pp. 173-178.
- (32) Silhères, P., "Architecture et urbanisme à La Loba, in Blázquez Martínez", in J. M. et al. (eds.), *La Loba (Fuenteovejuna, Cordoue, Espagne): La mine et le village minier antiques*, Bordeaux: 2002, pp. 146-162. Esp. pp. 158-162. Economy, p.167-168.
- (33) Curchin, pp.136-140. また「共和政期における鉱山経営等の請負また商取引のためにロスベニアに定住したイタリア人は、エリートではなく「攫千金」を狙った classe modesta——特に兵士と多様な商人——であり、従って「前一世紀に起った」公式のロロナイゼーションとは異なる」という次に挙げる論文の見解は「本稿第二章、第三章にも関わり重要」Chaves Tristán, F., "Papel de los <italicos> en la amondación hispana", in *Gerión* 17 (以下「Chaves Tristán, itálicos」と表記する), 1999, pp.309-310.
- (34) Economy, pp.168-172.
- (35) Polyb., 35, 1, 1-6. Richardson, Spain, p.79-80.
- (36) Cic. *II Verr.* 4, 25.
- (37) コルドウバで鑄造されたアス貨幣に記銘された「Q」の字を「クワエストールと考える研究者が多い。これが属州都市の政務官であるのか、帝国の政務官であるのかは議

論に決着がついていないが、有名なウルソ Urso の都市法碑文には都市政務官としてクワエストールはない。Chaves Tristan, *italicos*, p.306. 属州の政務官についての一般的な説明は Curchin, L. A., *The Local Magistrates of the Roman Spain*, Toronto, 1990.

(38) 長い例を挙げるとすれば、デキムス・ユニウス・ブルートゥス D. Iunius Brutus は前二三八年から前二三三年まで総督であった。

(39) App., *Ib.*, 43. クラッピクスの「条約」の内容については Richardson, J. S. *Hispaniae: Spain and the Development of Roman Imperialism 218-89B.C.* Cambridge, 1986 (以下 Richardson, *Hispaniae* と表記する), pp.112-117.

(40) 前一五四年、ケルト・イベリアの先住民居住地セギタローマとの折衝において自分たちが「クラッピクスの条約」に従うことを主張し、ローマ元老院もそのことを自体は認めた。App. *Ib.* 42-43.

(41) Liv., 43, 2, 1-11.

(42) Richardson, *Hispaniae*, p.114. Gruen, E. *Roman Politics and the criminal Courts*, Harvard, 1968, p.10. Lintott, A. W. *Imperium Romanum: Politics and Administration*, London, 1993, p.98; p.212, n.4. Brennan, T. C. *The Praetorship in the Roman Republic*, vol.1, Oxford, 2000, pp.172-173.

(43) Liv., 43, 3, 1-4. 註1にも参照のこと。

(44) 宮崎、二三三―二三五頁。カルテアはジブラルタルに近い既存の先住民居住地が起源であるが、史料によれば住民の中にはフェニキア人もいたらしい。“In eoque Carthea,

ut quidam aliquando Tartessos, et quam transuecti ex Africa Phoenices habitant.” (Mela, II, 5, 96).

(45) ネシタニア戦争については Richardson, *Hispaniae*, pp.132-137. Curchin, pp.33-39.

(46) Strab., 3, 2, 3; 3, 2, 11; 3, 2, 15. Ventura, pp.87-88. Jiménes & Carrillo, p. 56; p.72. n.22. Vaquerizo, D. & Murrillo J. F., “The Suburbs of Corduba”, in *Combrigra* 56, 2017 (以下 Suburbs と表記する), pp.113f. Melchor Gil, E. et al., “El Camino de Corduba a Ategua: nuevos Hallazgos de infraestructura viaria Romana en la Provincia de Córdoba”, *AAC* 8, 1997, p.162. Melchor Gil, E., “Historia Córdoba Romana desde su fundacion hasta advenimiento del principato”, in Rodórguez Neila, J. F. (ed.) *La ciudad y sus legados históricos Córdoba Romana*, Córdoba, 2016 (以下 Melchor Gil と表記する), pp.33-35.

(47) Ventura, p.89.

(48) Liv., 34, 21, 7. Cf. Gall. NA., 2, 22, 29.

(49) 前一八五年に帰還した総督が大量の金、銀を持ち帰っている。Liv., 39, 29, 6-7. さらにポリュビオスのカルタゴ・ノウアにのびるの有名な記述：「この銀鉱山はたいへん大きく、市からは二〇スタディオンのほど離れていて、外周四〇〇スタディオンの広さがある。そこには鉱夫四万人が働いており、当時ローマ国民のために一日につき二万五〇〇ドラクマの収益をもたらしたという。」Polyb., 34, 9, 8. (訳文は城江良和訳『ポリュビオス 歴史4』京都大学学術出版会、二〇一三年、二三三頁を用いた。) Richardson, *Hispaniae*, pp.116-117. ポリュビオスは前二二〇年頃に死去している

ローマ帝国形成期ホルドゥバの「ローマ人」(宮壽)

ので、この記事はそれ以前の状況を記述している。

- (50) 前註で挙げたホリュピオスの記述については解釈の余地が残る。すなわち「ローマ国民のため」という文言が、既にカルタゴ・ノウアでは前二世紀前半の段階で鉱山の経営が開始されていたと見なすことも可能である。Richardson, *Hispaniae*, p. 120. しかしこの文章からは、カルタゴ・ノウアから産出される大量の銀が、国庫に入れられたというところしか述べておらず、鉱山経営自体が何者によって担われていたのか、このからのみ知ることはできない。Economy, pp. 172-173.

- (15) Chaves Tristán, F., "The Iberian and early Roman Coinage of Hispania Ulterior Baetica", in *Key* (以下、Chaves Tristán, Iberian と表記する), pp. 167-168. Economy, pp. 165-166.
- (52) Liv., 40, 35, 4.
- (33) Richardson, *Spain*, pp. 71-72.
- (54) Chaves Tristán, Iberian, p. 147, pp. 152-153.
- (55) 先住民居住地から、前二世紀末の在地産陶器およびカンパニア陶器が大量に出土している。Ventura, p. 89. Jiménez & Carrillo, p. 58.
- (56) Cf. *Churchin*, pp. 133-134.
- (57) Ventura, p. 91.
- (58) 植民市研究として、主要なもののみを挙げる。Salmon, E. T., *Roman Colonization under the Republic*, London, 1969 (以下、Salmon と表記する)。Garstner, H., *Herrschaft und Verwaltung im republikanischen Italien: Die Beziehung Roms zu den italischen Gemeinden vom*

Latinerfriede 338 v. Chr. bis Bundesgenossenskrieg 91 B. Chr., München, 1988. Cornell, T., *The Beginnings of Rome: Italy and Rome from the Bronze Age to the Punic Wars (c. 1000-264 B. C.)*, London/N. Y., 1995. Bradley, G. & Wilson, J. P. (eds.), *Greek and Roman Colonization: Origins, Ideologies and Interactions*, Swansea, 2006. 中◎各論。

- (59) 両者の見解を支持する主な著書のみを挙げる。ラテン権植民市はなご: Salmon, p. 95, pp. 190-193. これは「ホルドゥバ・ウァレンティアを「植民市のスタイルで作られた都市」と。Fear, p. 62. 特にホルドゥバがラテン権植民市でなく、これを詳述。pp. 37-38. Richardson, *Spain*, p. 78. Melchor Gil, p. 31. ラテン権植民市はなご: Knapp, p. 10-12. Ventura, p. 88. Beltrán Lloris, F., "Les colonies latines d'Hispanie (II^e siècle av. n. è): emigration italique et integration politique", in Barrandon, N. & Kirbihler, F. (eds.), *Les Gouverneurs et les provinciaux sous la République romaine*, Rennes, 2011 (以下、Beltrán Lloris と表記する), p. 137-138, p. 142.
- (39) Cf. Jiménez & Carrillo, pp. 55-56.
- (19) 宮壽、二二六頁。
- (32) Knapp, p. 11. Jiménez & Carrillo, p. 56. Houton, p. 48.
- (39) 註一九および二三を見よ。カエサル自身が「ホルドゥバをオキピドゥム oppidum と呼んでくることにも注意」これは一般には法的地位を持たなく「町」の意。Caes. *Bell. civ.* 2.19.3.
- (64) 植民市があつたと主張する研究者のうち、ヘルトラン＝

ロリスはそもそも前二世紀のラテン権植民市を法的にと
うよりも政治的・社会的に定義する。そこで問題とされて
いるのは、権利・義務ではなく、貨幣に記銘されたQの文
字（クワエストールか。註三七を参照）、政務官のローマ風の
名前などである。しかしこの政務官が都市政務官であると
いう確証はない。Beltrán Lloris, p.131; p.137.

(65) ここで改めて註三三でとりあげた、チャベス・トリスタン
の見解について考えておきたい。属州総督とその周辺の人々
は一般にローマ人有力者の出自であるが、鉱山開発に従事
したであろう人々は、未だ事実上の戦地であった前二世紀
のヒスパニアにあって、おそらく命の危険を冒して一攫千
金を目指す *classe modesta* の出自であったと考えることが
妥当であろう。こうした人々が軍の保護を受けつつ属州の
経済活動を担っていたというのが、この時期の現実であり、
その意味でこれは「公式のコロナイゼーション」とはほど
遠いものだった。国家経営の鉱山開発に従事する大請負業
者がこの地に進出するのは、おそらく前一世紀末のカエサ
ル期以降のことであろう。

(66) App. Ib.99.

(67) *Caes. Bell.Hisp.*,34.